

レンズを通して

連載

十二月

写真・文 高田宮妃久子殿下



マガモ 59cm カモ科
ユーラシア大陸の中南部および北米大陸の森林地帯で繁殖し、冬期はやや南に渡る。ヨーロッパ、アメリカ南部では留鳥。わが国では北海道で留鳥、本州の山地でも少数が繁殖するが主に冬鳥として全国に渡来する。

紅葉をバックに

冬期、全国の湖沼、河原、沿岸、公園の池などで見られる。太平洋側より日本海側に多く渡来。他のカモ類同様、日中は休息し、夜になると近隣の水辺や田んぼで緑の葉をつけた植物や落ち穂、タニシなどの貝類を食べる。



マガモの エクリップス換羽

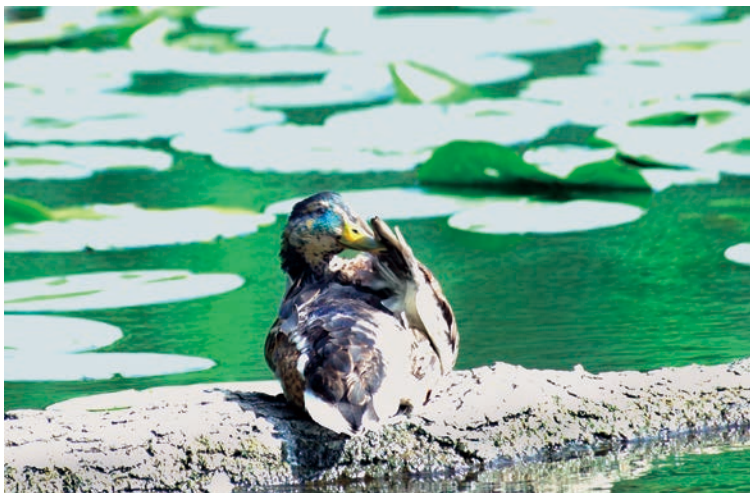
写真文 高田宮妃久子

秋から冬の初めに北から渡来し、日本で越冬する冬鳥の中で、かなりの存在感を放つのがカモの仲間です。その美しい姿は、日本中で観察することができます。そこで今回は、ルックス的に多くの方にとって「The カモ」、日本のカモの代表格であるマガモについて書かせていただきます。

マガモの特徴は、オスの美しくメタリックな輝きを発する緑色の頭です。しかし、一年中この色鮮やかな姿をしているわけではありません。オスがこの派手な色合いになるのは、メスにアピールするためであり、捕食者に見つかりやすいというリスクを伴います。

いささか専門的になりますが、ここから題名にもあります「エクリップス換羽^{かんう}」のお話です。マガモ、そしてマガモと同様に色鮮やかな姿をした多くのカモ類のオスは、繁殖が終わると換羽して、メスのように地味な姿になります。秋までの短い期間でも、目立たない姿で過ごす方が有利だからです。夏の時期のこの地味な姿は「エクリップス」と呼ばれますが、私はこの表現をととても気に入っています。「エクリップス」とは「覆い隠す」とか「輝きを失わせる」という意味で、「月食」や「日食」を表す時にも使われる単語です。マガモの輝くような繁殖羽が地味な茶色になることを考えると、まさに言い得て妙だと思います。

カモ類のエクリップス羽への換羽の特徴は、短期間に



エクリップス換羽中のマガモのオス

6月にドイツで撮影。

これから地味な姿のエクリップスになる前。

マガモは人との関わりが深く、

アヒルは本種を家禽(かきん)化したもの。

また、アヒルとマガモを交配したものが

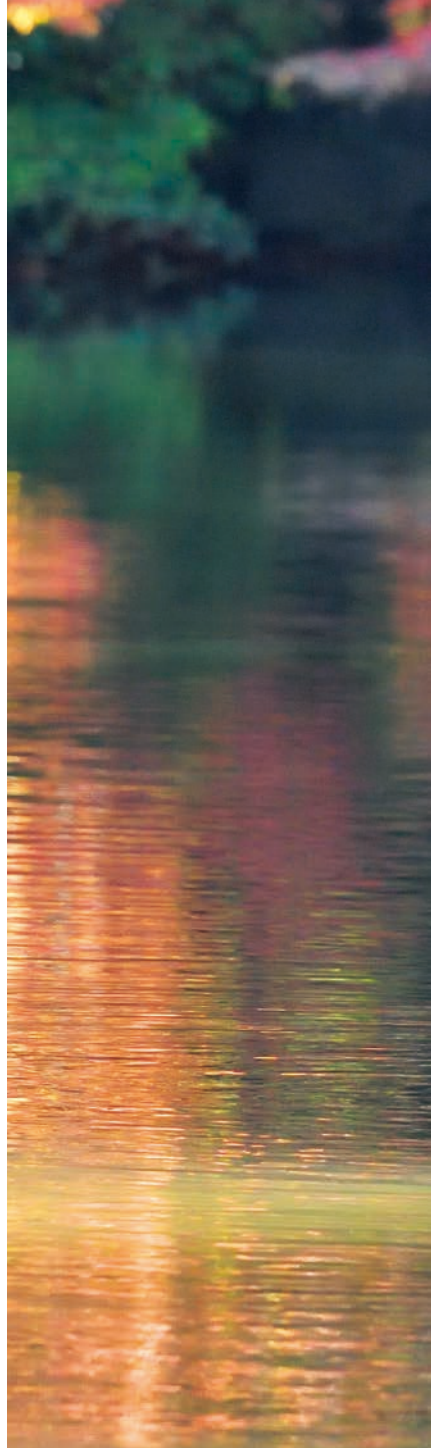
アイガモである。狩猟の対象となってきた

歴史があり、野生のマガモは

人間に対して警戒心が強い。

マガモの母子

エクリップスのオスはメスによく似ているが、
嘴(くちばし)全体が黄色い。ヒナは孵化(ふか)した直後に
初めて見た動く物体を親とみなす「刷り込み」という習性がある。
そのため母鳥について回り、
自分で餌を取るのに、単独でも子育てが可能。
この母鳥は6羽のヒナを連れていた。



換羽を行うため、一時的に飛べなくなる点にあります。
エクリップス換羽が行われる時期には、目立たない安全
に過ごせる場所に移動し、集団で換羽をするそうです。
夏が終わり初秋になると、繁殖羽への換羽が始まり、
北から渡来する多くのマガモは、エクリップス換羽がほ
ぼ終了した姿で渡ってきます。そして間もなく、写真
のような姿でメスへのアピールを始めるのです。

ところで、カモ類の中にはカルガモのように、オス
の繁殖羽が地味な種もいます。これらのカモの換羽は
「エクリップス」とは呼びません。エクリップスの意味か
らすると、確かに、「地味から地味」では当てはまら
ないですね。

同じカモの仲間でも、色鮮やかな繁殖羽からエクリ
プスになる種と、地味なままの種がいるのはなぜか
——それは、メスによるオスの選択基準の違いによ
ります。多くのカモ類のメスが色鮮やかなオスを好ん
だのに対し、一部のカモ類のメスは、オスの誠実さ(カ
ルガモのオスは浮気をしない!)といったほかの選択
基準によりオスを選んだため、オスが色鮮やかな繁殖
羽になるとい進歩をせず、メスと同様に捕食者から
狙われにくい地味な姿になったと考えられています。

なお、カルガモのオスは地味であっても、ほかのカ
モ同様、子育ては手伝いません。カモは連れているヒ
ナの数が多く、あなたたちだけでも育メンして
くださいよ」と言いたくなります。しかし、安易な感
情移入は禁物。ヒナが多いということは最終的な生存
率と関係しており、生まれたヒナが全員成鳥になつた
ら、自然界のバランスは崩れてしまいます。

自然の調和を尊重しながら、この季節は美しいカモ
たちの姿に魅了されることといたしましょう。皆さま
も是非お楽しみくださいませ。